

2022年1月23日 降誕節第5主日礼拝

メッセージ「試練と信仰」

牛田 匡 牧師

聖書 ペトロの手紙Ⅰ 1章3-12節

今回の聖書の言葉は、「ペトロの手紙Ⅰ」からでした。これはイエス様の「一番弟子」とも言えるようなペトロが書いたという体裁をとって、ペトロよりも後の時代の人が書いた手紙だろうと言われていています。詳しい時代はハッキリとは分かっていませんが、おそらく1世紀の終わりごろではないかと考えられ、あて先はイスラエルから遠く離れた異邦人たちの土地で、迫害や困難の中にあつた教会の人たちに送られ、回覧されたのだと思われます。その主な内容は「今は様々な困難があつても、イエス・キリストへの信仰を失うことなく、信仰によって耐え忍び、やがて来るべき救いを待ち望みましょう」というような励ましの手紙となっています。

先ほど読んだ1章にも、そのような内容が書いてありました。例えば、6節7節です。「(あなた方は)今しばらくの間、さまざまな試練に悩まなければならないかもしれませんが、あなたがたの信仰の試練は、火で精錬されながらも朽ちるほかない金よりはるかに尊く、イエス・キリストが現れるときに、称賛と栄光と誉れとをもたらすのです」。具体的な「試練」の内容、当時の教会の人々が受けていた迫害や困難の内容は分かりません。時代や場所が特定できない分、詳しい内容も分からないようです。ですが、恐らく各地で様々な迫害、嫌がらせがあつたり、教会に共に集まるということにも困難があつたり、信仰を失つたりする仲間もいたのではないかと想像します。だからこそ、この手紙は書かれました。

手紙の著者は一貫して読者である教会の人々を励まし続けています。3節から5節では、読者であるあなた方、つまり私たちは「神の豊かな憐みによって、死者の中からのイエス・キリストの復活を通して、新たに生まれさせられ、生ける希望を与えられた」特別な存在ですよ。また私たちは「天に蓄えられている、朽ちず、汚れず、消えることのないものを受け継ぐ者と」されています。そんな特別な存在である私たちは「終わりの時に現されるように準備されている救いを受けるために、神の力により、信仰によって守られているのです」と記されています。

これらの言葉によって、困難の中にあっても、励まされ、再び立ち上がる力を得られた人々は少なくなかったのでしょう。だからこそこの手紙は聖書の中に加えられ、今日にまで至っているのだと思います。しかし、見方を変えると、「将来、大きな見返り、救いが得られるのだから、今はどんなにつらく苦しいことがあっても、我慢して忍耐しなさい。私たちは神様から選ばれた特別な存在なのですよ」と言い続けることは、人々を抑圧し搾取する社会構造を維持するために、為政者や権力者たちにとっては、とても都合のよい言葉でもありました。さて現代を生きる私たちは、この言葉をどちらの立場から読むでしょうか。

「試練」という言葉の元々の意味は、「試す」「試みる」という意味です。7 節では「火で精錬されて溶けてしまう金」という表現がありますが、これは火にくべられて表面を覆っているメッキや不純物が溶かされていく、本物かどうかが明らかにされていく、ということではないかと思えます。「本物かどうか確かめる」と言ってもいいかもしれません。不条理としか言いようがない困難に遭った時、「どうしてこんなことが起こるのか」と思う人は多いと思えますが、その時に「これは自分に与えられた試練なんだ」「この試練を通して、自分は試されている。磨かれていくんだ」と思えることで、乗り越える力を得られる人もいることでしょう。しかし、それを乗り越えることができない人がいることもまた、確かなのではないのでしょうか。

年明けから新型コロナウイルス感染症の感染者数は急増していて、日々過去最高の数字が更新され続けています。もうすでに昨年夏の「第5波」の時の2倍以上にもなりました。医療機関も保健所もパンクしています。そのような中で、先週にはトンガの火山の大噴火があり、津波があり、日本でも各地に津波警報が出されて、緊張が走りました。さらに大学入学共通テストの朝には、東京大学前で受験生を含む3名が刺されるという通り魔事件もありました。しかも、その犯人は受験勉強に行き詰まりを感じていた17歳の少年だったということです。なぜ、そんなことになったのか。何が少年をそこまで追い込んでしまったのか。詳しいことは分かりませんが、深い絶望の末のことだったのではないかと想像します。

「試練」についての聖書の言葉として、「コリントの信徒への手紙1」10章13節の言葉も有名です。「あなたがたを襲った試練で、世の常でないものはありませ

ん。神は真実な方です。あなたがたを耐えられないような試練に遭わせることはならず、試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道をも備えてくださいます」。この言葉をもっと短くして「神は耐えられない試練を与えない」というような言葉も、よく聞かれるかと思いますが、これらの言葉によって、支えられ、励まされる人たちがいる一方で、そうではない人たちがいることも確かです。私が聞いたのは、「家族や親しい人を病気や事故などで失った際に、友人たちが励ましの言葉として、この言葉を伝えてくれたけれども、大きなお世話であって、余計に傷をえぐられるようだった」というものでした。その出来事が「試練」かどうかを決めるのは、他人ではなく、あくまでも自分自身であって、それもいつでもよいわけではなく、それぞれに時期があるのだということでしょう。

「主の祈り」の中には、「私たちが試みに遭わせないでください」という一文があります。他の翻訳では「私たちが誘惑に遭わせないでください」という訳もあります。この言葉の背景には、私たちが出会う試みや誘惑は、神様から与えられたもの、送られたものという考えがあるわけですが、本当にそうなのでしょうか。「ヤコブの手紙」1章 13-14節には「誘惑に遭うとき、誰も『神から誘惑されている』と言ってはなりません。(中略)人はそれぞれ、自分の欲望に引かれ、おびき寄せられて、誘惑されるのです」と書かれています。

私たちは日々に、大なり小なり様々な困難や試練と出会っては、それらを乗り越えているのではないかと思います。そのような経験を積み重ねながら「このような試み、誘惑に打ち克ち、試練を乗り越えられている自分は優秀で、有能で、価値のある存在だ」と、いつの間にかに思い上がってしまっていることはないでしょうか。裏を返せば「それらを乗り越えられない、失敗してしまう自分は価値のない存在だ」となってしまいます。思うように成績が上がらないということに行き詰って、犯行に及んでしまった少年の心の中も、そのような気持ちになってしまっていたのではないかと想像します。

自分で自分を価値づけ、評価してしまうこと。それこそが「誘惑」なのではないかと思います。「試練と信仰」と言う時、「信仰があれば、試練はなくなる」と言えば嘘になります。信仰があっても、試練はあります。さらに「信仰があれば、試練の中でも守られる。試練はやがて乗り越えられる」と言う時、それがどのような形で、い

つ頃になるのかは、人それぞれであり、一つ一つ個別に異なっているということにも注意が必要です。すぐに答えが出ることや、出ないことに一喜一憂することは、自分で自分を誘惑して裁いていることです。むしろ、様々な試練や困難がある中でも、それでも自分は一人ではないということ、命を与えられている神様が共におられるということ、支えられているということに信頼して、諦めずに歩みを起こすこと、そこに救いがあり、希望があるのではないのでしょうか。

世界中で新型コロナウイルスの感染がまん延し、何が正しい対応なのかが分からなくなってきました。右か左か、成功か失敗か、すぐに白黒の判断がつかないことも多くあります。そのような現実の中でも、命の神は私たちに「命を選びなさい」（申命記 30:19）と言われます。そして「あなたはそれを行うことができる」（申命記 30:14）とも言われます。自分の力で行うのではなく、共におられる神様によって支えられ、助けられて、私たちは今日も歩みを進めていきます。